

ジョルジュ・フェドー『私たちの未来の夫』翻訳

桑原隆行

解説

『私たちの未来の夫』は一幕物の小劇でフェドーの初期作品に属する。エルネスト・ルグヴェ編集、ポール・オランドルフ発刊の『地方劇』叢書の第8シリーズで出版されたのが、1882年早々作者若干20歳のときなのだ。その叢書にはモノログ劇と、素人が演じやすい登場人物二人、三人、四人の小劇が収録されている。ウジェーヌ・ラビッシュ、アンドレ・トゥリエ、アドリアン・ドカールセルのような有名作家たちは躊躇うことなく、この選集に入れてもらう。

この戯曲は出版12年後、1894年2月11日に初めて、地理ホール(1)で上演された。この甚だしい遅れはおそらく作品の短さで説明がつく。つまり、パリの大劇場のどこかで前座劇で上演されるにはあまりに短かすぎたのだ。その代わりに、短さゆえ、この戯曲ははるかに普通にグループ劇にぴったりだ、そのために作られたのは極めて明らかだ。とても若い作家フェドーにはおそらく、入会していたクラブの一つ(例えば、「カスタネット」クラブ、「寄付」クラブ、「内的芸術」クラブ)が催す会の間に上演させる以外の願望はなかった。

『私たちの未来の夫』は気のきいた小品だが、主題は斬新ではない(2)。文体がミュッセの『喜劇と諺』を思わせるが、その影響はここでは明らかだ。作風がまだ少し若々しいこの小品では、作者の極めて有望な作劇の才能、とりわけ、将来存分に確認されることになる台詞におけるある種の自在さが証明されている。

上演される前に出版されたこの唯一のフェドーの戯曲は1952年、ベリエ版『戯曲全集』の第6巻に収録された。

- (1) サン＝ジェルマン大通り184番地の地理協会にあった。
 (2) 『私たちの未来の夫』の二人の人物の状況はたとえば、すでに『婦人たちの闘い』(1851)に見られる。スクリーブのこの戯曲では、ドトルヴァル伯爵夫人と若い姪レオニーが同じ男アンリ・ド・フラヴィニユールに恋している。

あらすじ

若い未亡人アンリエット・トレヴィルはパーティーを計画する。彼女にぞっこんであるように見えるド・ネリス氏がパーティーの間に思い切ってプロポーズしてくれるのを期待しているのだ。

従妹のヴァランチヌが不意にやって来て打ち明ける、ある男性—誰かを彼女は明かさな—にキスされ、プロポーズされた。彼を愛しているのだ。アンリエットは若い娘(ヴァランチヌ)の母親に話してあげると約束する。しかし、ヴァランチヌは求婚者が他ならぬド・ネリス氏であると明かす。それで、アンリエットはすっかり態度を変えて、その結婚計画は滑稽だと言う。二人の女性の口論。ヴァランチヌはアンリエットを嫉妬しているだけだと言って責める。

新聞を読んでいたアンリエットは突然、そこにド・ネリス氏と金持ちの遺産相続人ド・スタンフェルド嬢の結婚が告知されているのを見つける。さてこれで二人の女性は和解。抱き合い、彼女らの「未来の夫」を忘れるために、舞踏会の間出来るだけ楽しもうと約束し合う。

私たちの未来の夫

とても豪華な家具付きの大きな客間。奥に灯した枝付き燭台を置いた暖炉。左右に側面ドア。テーブル、肘掛け椅子数脚、ソファ、等々・・・ テーブルの上には新聞。

第一場

アンリエット、ひとり

パーティードレスにダイヤモンドで飾ったアンリエットが奥のドアの一つから入り、観客には見えない誰かに話す。

アンリエット だから、よく分かった？ いたるところに蠟燭をね、明かりを・・・たくさんの明かりを！
 つまり、すべてが完璧になるようにして。(入ってき

ながら。) おお！ そうよ、たくさんの明かり、大好きだわ、私！・・・驚くほど私の顔に似合うんだもの！（鏡に近づく。）ええと！ で、マダム、あなたが無条件に美しいことはお分かりね。その衣装はあなたにすばらしくお似合いわ！・・・私のひどい勘違いか、そうでなければ、あなたはまた、何か新たに殿方の心をつかむのね！・・・あの淑女たちは全員怒り狂うわ！ とても嫉妬深いんですもの、女の人たちって！・・・例えば、あの紳士の方々はといえば・・・ところが、まあ、率直に言えば、ときどき男の人たちの気持ちが解るわ！（掛時計を見ながら。）8時15分・・・（座りながら。）やれやれ、まだ一時間ある、たっぷり一時間の退屈な時間。待っているときはぞっとするほど時間が長く思えるものよ・・・思わず不安で動揺していると感じる・・・ああ！ もちろん、結婚のことを考えてあなたは少し動揺しているのかも・・・とりわけ相手は若い男で、自分は老將軍の未亡人ですもの！・・・ああ！ 愛に関しては、私のかわいそうな夫は浪費するほどたっぷり注いでくれる癖さえなかったから！ まあ！ そのことで非難はしない！・・・愛しいあの男を！ あの人のせいじゃないことはよく分かっているの！・・・でも、とにかく、率直に言えば、あの人は少し・・・何と言うか・・・少し・・・儉約家すぎたわ・・・おお！ でも、ド・ネリスさんとなら、その心配はないわ！ 若いんですもの、彼は！ 南仏の人だもの！ 南仏の人なら、間違いないわ！・・・つまり、その心配はない！・・・ただ来てくれさえすればね、だって音沙汰がなくなってもうしばらくになるんですもの・・・ふん！ 招待したんだから、来てくれる。その上、私を愛しているのだから！・・・私と結婚するつもりなのよ、確かだわ・・・彼はこのパーティーを利用して・・・それに先日すでに、プチ・サロンで私が葉巻色のきれいなソファーに座っていたとき、彼が私の前でひざまず跪いた、あれは、確かに、結婚を申し込むためだった・・・結婚願望がないわけじゃなかったのね、だから、もし邪魔が入らなかったなら！・・・（呼び鈴が鳴る。）おや！ 鳴ったわ！（時間を見ながら。）9時20分前。こんなに早く一体誰かしら？

第二場

アンリエット、それからヴァランチーヌ
舞台裏にヴァランチーヌの声が聞こえる。

ヴァランチーヌ サンキュー・ヴェリ・マッチ、ミス・

アリス！ ユー・メイ・ゴー・ナウ！ サンキュー！
アンリエット ヴァランチーヌ！
ヴァランチーヌ、入ってくる。 私よ、おねえ従姉さま！ こんにちは！
アンリエット、キスする。 ずいぶん早いのね！
ヴァランチーヌ 非難？
アンリエット 子供ね、まったく！
ヴァランチーヌ あのね、舞踏会の少し前に来たかったの・・・あなたに重大な事を話さなければならなかったから！
アンリエット、微笑む。 あら！ まあ！
ヴァランチーヌ、座る。 ああ！ とても重大なことなの！ 分かるわよね、ママにはとても言えないことでも、あなたになら言える。
アンリエット そりゃご覧の通りよ、マドモワゼル！
ヴァランチーヌ ええ、あなたに助言を求めに来たの！・・・でも、まず、心からのおめでとうを言わせて。いや、なんて今夜のあなたはきれいなかしら！
アンリエット まあ！ 「今夜の」というのはご親切に。
ヴァランチーヌ ああ！ 相変わずからかい好きね、あなたって・・・私が言いたいのは「今夜はなんて素敵なお装いの・・・」ということ！・・・
アンリエット そう思う？
ヴァランチーヌ でも要するに、あなたと比べたら、まったく簡素な白いドレスの私は子供のシンデレラだわ。
アンリエット あなただって！ それで、はるかに魅力的よ！
ヴァランチーヌ、溜め息。 それにダイヤモンドだって！ あなたは充分持ってるでしょ！ ああ！ 私だってつけたいの、ダイヤモンドを！
アンリエット よく分かってるでしょうけど、若い娘はつけないのよ。
ヴァランチーヌ、無邪気に。 ええ、それなのに未亡人は！・・・いや、なんとも未亡人って快適なものに違いないわね！
アンリエット おやまあ、今の発言はあなたの未来の夫にとって親切なことね！
ヴァランチーヌ あら！ 本当ね！ 馬鹿なことを言ってしまった！ 困ったわ！ 馬鹿なことしか言わないか・・・そうでなければ全然何も言わないかなの、それで馬鹿になってしまうの・・・馬鹿なことを言うのが怖くて！
アンリエット 子供ね、まったく！
彼女は立ち上がって、カンバス刺繍を取りに行く。
ヴァランチーヌ 言ったけど、でもまた、あなたからいくつか助言をもらうのを当てにしてもいるの・・・あっ！ まず、若い男性から話しかけられたら、

どうすべきなの？・・・私ったら、いつもとてもドギマギしてしまうの！・・・だから、ほら、あなたのこの前の舞踏会で、ド・メルクールさんが私のところに来て、「ああ！ マドモワゼル、あなたは本当に魅力的です！」といったようなことを言ったの。えーっと！ 彼にどう答えたか分かる？

アンリエット、座って、カンバス刺繍をしながら。いいえ。

ヴァランチーヌ 「あなたもですわ、ムッシュー！」と言ったの。結果は見え見えでしょ！・・・それで彼は馬鹿にされていると思って行ってしまった。

アンリエット かわいそうに、それが無垢というものよ。

ヴァランチーヌ、無邪気に。 ああ！ ええ、無垢ね、とても感心する美点だわ・・・持っているのが他の人たちならね！・・・あなたと同じぐらい色んなことを知りたいものだわ！ ちえっ！

アンリエット、咎めるように。 ヴァランチーヌ！

ヴァランチーヌ またドジなことを・・・あのね、自分でもどうにもならないの！・・・だから絶対私に言ってくれなければ・・・

アンリエット あっ！ ごめんなさいね、でもまず、どういうことなの？

ヴァランチーヌ、赤くなる。 だって説明するのがとても難しいの！・・・つまり・・・あの・・・

アンリエット 赤くなった！ 目を伏せたわね！ 分かった、若い男のことね！

ヴァランチーヌ えっ！ どうして分かるの？

アンリエット 若い娘だったときがあるのよ、私だって。赤くなったりしたかしら、当時の私？ さあ、お嬢ちゃま、私は騙されませんからね！

ヴァランチーヌ ええと！ そうなの、若い男性よ。

アンリエット 分かっていたわ！・・・で、名前は？

ヴァランチーヌ、秘密めかした様子。 あっ！ それはあとで言うわ。

アンリエット 秘密、結構なこと！ 少なくとも、ハンサム？

ヴァランチーヌ 彼が？ ああ！ とってもね！

アンリエット とってもですって！ 見せてくれるわね？

ヴァランチーヌ 今夜、会ってみて！・・・そうして私の趣味がいいかどうか言ってね！

アンリエット まあ、本当にあなたって面白いわ！・・・それで・・・彼はあなたを愛しているの？

ヴァランチーヌ ああ！ ええ、私を愛しているのよ！

先日、結婚に同意してもらえたらとても幸せだ、とさえ言ったのよ。

アンリエット へえ！ そんなの証拠にならないわ。

ヴァランチーヌ まあ！ でも彼にとっては、本気なの！ 実は、あなたのこの前の舞踏会で、彼と踊ったわ・・・すると、踊りながら、そんなふうも

見せずに、彼ったらプチ・サロンに私を引っぱっていったのよ、ねえ、プチ・サロンへよ。

アンリエット ええ、ええ。(傍白。) ちょうどいい場所みたいだわ！

ヴァランチーヌ ちょうど誰もいなかった・・・それで彼は私をあなたの葉巻色のソファに座らせた・・・

アンリエット 私の葉巻色のソファに？

ヴァランチーヌ そうなの！ 驚いた？

アンリエット 私が！ いいえ、全然。(傍白。) ああ！

あの男たちときたら、みんな同じね！・・・(大声で。) 私の毛糸を持ってきて！

ヴァランチーヌ、編み物かごを持ってくる。 それから、私が座ると、ムッシュー・ド・・・

アンリエット、激しく。 ムッシュー・ド・・・？

ヴァランチーヌ、にっこりして。 そのムッシューがついに私の両手を取り、目の前で跪くの・・・ほら、こんなふうに！ (彼女は従姉の前に跪き、腰をつかむ。) ああ！ 男の人が自分の前に跪くのを見て驚くほどに何て気持ちのいいことなの！

アンリエット 私たちの夫になる殿方は必ずしもそうは思わないわね・・・まあいいから、話を続けて。

ヴァランチーヌ ええと、だから、私の前で跪き、甘い声で色んなことを話してくれたわ、ああ、だって色んなことをよ！ 必ずしも解らなかった、けれど、自分が話を喜んでいるのは分かった。ああ！ だって、とにかく！ 断言するけど、私、とても困惑していたわ。だから、馬鹿なことを言うのが心配で、彼が言うすべてのことに「ええ」と答えるだけにしたの。

アンリエット、カンバス刺繍を置く。 ええ、と言ったの？

しょうがない子ね！

ヴァランチーヌ、立ち上がる。 失敗だったかしら？

アンリエット 男の人に対しては、とても危険だわ！

ヴァランチーヌ だってどう答えたらいいか分からなかったの、私！ もし、あなたに彼が話すのを聞いてもらっていたら。「ああ！ マドモワゼル、あなたは綺麗だ、愛しています。——ウィ？ ああ、ヴァランチーヌ—彼は私をヴァランチーヌと呼んだの—ああ！ ヴァランチーヌ、ぼくの生涯の夢を叶えてください！ ぼくのハートは炎の熱さで焼かれています、あなたの美しい目が引き起した・・・火事を消せるのはあなただけなのです」——それって、どういう意味なのかあまりよく分からなかったわ！——「つまり、ヴァランチーヌ、あなたはぼくの女王、ぼくの天使なのです、ぼくの妻になってくれませんか？」

アンリエット、立ち上がり、激しく。 で、返事をしたの？

ヴァランチーヌ ええ！・・・もちろん、とても動揺していて、どう言っただいぶん分からなかったの。

アンリエット 男たちときたら、とても厚かましいんだから！

ヴァランチーヌ、まじめに。 ああ！ そうね！

アンリエット、驚いて。「ああ！ そうね！」ですって！ どうして分かるの？

ヴァランチーヌ、困惑して。 だって、^{おねえ}従姉さま！

アンリエット ああ！ 「だって、^{おねえ}従姉さま」は言いっこなしよ。それに私に何か隠しているのはよく分かっているのよ！ でも、そんなことであなたが義務を果たしたとは思いませんからね、よく分かった？ だから説明してもらいます・・・

ヴァランチーヌ、彼女の肩に凭れかかる。 ええ、いいわ！ まさしく、あなたに全部話すほうがいいわ！・・・ママには思い切って話すことは絶対できなかったでしょうけれど、あなたになら、もっと勇気を出して言えると思う。(目を伏せる。) ああ！ 私の好きなアンリエット、彼が何をしたか聞いてくれる！

アンリエット、心配そうに。 あっ！ まあ！ すると、重大なこと？

ヴァランチーヌ、すっかり動揺して。 そうなの、重大なの。つまり、今、私たち結婚させてもらわなければならないの。

アンリエット、やさしく抱きしめる。 まさか、信じられない。ああ！ かわいそうに！ かわいそうに！

ヴァランチーヌ、苦しげに。 キスされたの！

アンリエット、口調を変える。 ああ！ びっくりしたじゃない。

座る。

ヴァランチーヌ、彼女も座る。 すると、重大だとは思わないのね、あなたは？

アンリエット ちえ！ 私があなたの聴罪司祭なら、「とても重大なことだ！」と言うでしょうね。でも私はね、かわいそうな嬢ちゃん、あなたを非難する気になれないの。(溜息) 男の人たちのことは知りすぎるほど知っているから。

ヴァランチーヌ まさか、信じられないわ！

アンリエット それに、そんなつまらないことで結婚しなければならないのなら、この世に二十五で独身の女性はほとんどいなくなると思う。

彼女はまたキャンバス刺繍を手取る。

ヴァランチーヌ それじゃ、^{おねえ}従姉さま、私を恨んでいないわね？

アンリエット 私、愛しい嬢ちゃん・・・おお！ 全然！・・・私のかわいそうな將軍はよく言っていたわ、「愛は最良の言い訳！」ってね・・・私は彼と同意見だった！

ヴァランチーヌ でもそれじゃ・・・もし、今夜彼が私を連れていきたいと思ったら・・・応じないといけないの？

アンリエット、激しく。 気をつけなさいね！・・・男の人たちはいつも最初より二回目のほうがもっと厚かましいんだから！

ヴァランチーヌ でもそれじゃ、どうすればいいの？ 踊ってくださいと頼まれたら、断られないわよね？・・・結婚を約束してくれたんですもの。

アンリエット ああ！ あなたの望んでいることが分かるわ！・・・さあさあ、嬢ちゃん、すると彼を好きなのね？

ヴァランチーヌ、目を伏せながら。 まあ！ 分からないわ！

アンリエット いいわ！ 解った！ 多くの意味があるのよ！・・・で、彼はあなたを好きなの？

ヴァランチーヌ 熱烈に。

アンリエット ええと、となれば、申し分ないわ！・・・彼がそんなだから、あなたのお母さんに話してあげる、同意が得られたら、結婚しなさい！

ヴァランチーヌ 結婚するわ！ (アンリエットをやさしく抱きしめる。) ああ！ 私の大切なアンリエット！

アンリエット、からかい顔で。 ねえ！ あなたたちが愛されるチャンスは何ていっぱいなの！・・・何てこと！ 結婚するのが本当に嬉しいの、あなた？

ヴァランチーヌ、興奮して。 ^{おねえ}従姉さま！ だって、結婚するのが私の夢なの！ 奥様と呼ばれる！ダイヤモンドを身につける！・・・パレ＝ロワイヤルに行く！・・・

アンリエット おやまあ！ 夫婦の義務を理解するあなた流のやり方だわね！ おみごとなこと！

ヴァランチーヌ だって^{おねえ}従姉さま・・・

アンリエット つまり、あなたたちは愛し合っている、それが肝心よ！ それに、彼は結婚するとあなたに約束したのだから、あなたのお母さんに話してあげる・・・でもせめて、それにはあなたの・・・結婚相手の名前を知っておくのがよくない？

ヴァランチーヌ それは、まさに・・・それに、もう隠しておく理由はないんだし！・・・ド・ネリスさんなの。

アンリエット、啞然として。 ムッシュー・ド・ネリス！ 素早くキャンバス刺繍を置く。

ヴァランチーヌ ええ！ 何か驚いた？

アンリエット いいえ！ まさか！

ヴァランチーヌ まさかですって！ でも、まったく本当のことなの、間違いないわ。

アンリエット ああ！ 言っておくわ、彼はあなたを愛してなんかいない・・・絶対にね。

ヴァランチーヌ だって、愛していると言われたんだもの！

アンリエット、立ち上がる。 へえ、まさか！ そんなことを信じてるの、あなたって？

ヴァランチーヌ、同じく立ち上がる。じゃあ、どうして愛していないことになるの、結局？

アンリエット なぜって・・・愛していないからよ。

ヴァランチーヌ でも、私と結婚するはずなのよ、まさに！

アンリエット まあ！ 私ともね、まさに！

ヴァランチーヌ、啞然。あなたと結婚？

アンリエット ええ。

ヴァランチーヌ 求婚されたの？

アンリエット ああ！ されたも同然よ。今夜求婚してくるわ！

ヴァランチーヌ ああ！ でも、私は、すでに求婚された。これが違いね。

アンリエット へえ！ だからどうしたというの？ あの殿方たちにとって、結婚は恋の偽名ではないの？

ヴァランチーヌ だって・・・

アンリエット それから、まず、彼はあなたには全然ふさわしくないわ。あなたは彼には若すぎるんだもの。

ヴァランチーヌ なんですって！ だって、彼は若いわ・・・

アンリエット 彼が！ 若いですって！ 三十なのよ、せいぜいが若々しいといったところね！ 以上！ さあ、あなたには全然ふさわしくないの！

ヴァランチーヌ、苛立って。まあ、仕方ないじゃない！ 私の問題よ、それにママに頼んでみると約束してくれたのだから・・・

アンリエット 私が！ あなたの母親に頼む！ とんでもない！ なんてことかしら！・・・不幸にされたといつかあなたに非難されるかもしれないなんていやよ。

ヴァランチーヌ 私の不幸！

アンリエット もちろん！ よく分かるわね、本当に愛されてはいないのよ。

ヴァランチーヌ どうしてそんなこと？

アンリエット 言い寄ったからよ、私にもね！

ヴァランチーヌ でも・・・

アンリエット、徐々に興奮して。それにすべての女性たちに同じようにしているかもしれないわ！

ヴァランチーヌ、いらいらして。まあ！

アンリエット それに、そんな男が貞節な夫になるとでも？・・・冗談じゃないわ！

ヴァランチーヌ ええと、それじゃ、どうして彼と結婚したいの？

アンリエット、困惑して。どうしてって・・・

ヴァランチーヌ まったく！ あなたにも私にも同じことだわ。思うに、浮気な夫を持つという唯一の楽しみのためではないわね・・・

アンリエット、すげなく。まず、今は私のことは問題

にならない・・・それから、言わせてもらうと、これは同じことでは全然ないわ・・・未亡人はその点に関して若い娘より経験があるんだから。

ヴァランチーヌ でも・・・

アンリエット そもそも、あなただって彼を愛してはいない！ とんでもない！ あなたが結婚したいのは、気紛れからだわ・・・パレ＝ロワイヤルに行くためね。

ヴァランチーヌ でも、私が言うとおりでしょ・・・

アンリエット ああ！ まあいいわ！ それはみな少女の恋愛事よ！ 束の間の情熱！ 燃え上がるけれど続かない・・・さあ、嬢ちゃん、私はその年頃がどんなだかよく分かっている。若い男を見かけるのね？ すぐ、夢中になってしまう！ その男は甘い言葉をかけよう、ほんの少しだけ言い寄ろうという気をおこすのよね？ ああ！ そうすると、言うまでもないわね！ 結婚してくれるとすぐに思ってしまう・・・少しでも小説を読んでもいれば、ハンサムな若い男があなたに連れ去る許可を求めないのはいつでも驚きね！・・・そうよ、以上があなたの年頃のあなたの姿だわ！ 束の間の恋、それだけね！ でも真剣な恋は！ 冗談じゃない、ノン！ ノン！ ノン！ 何度も言うけれど、無し！

ヴァランチーヌ、手厳しく。さっきはあまりそんなふうには言ってなかったわ！

アンリエット よく考えたからだわ。

ヴァランチーヌ すばやいことね、まったく！ というのは、私がド・ネリスさんの名前を口に出してからすぐなんだもの、・・・

アンリエット 何を言いたいの？

ヴァランチーヌ ねえ！ 言いたいのあなたそんなふうにする訳はよく分かっているということと・・・最高の弁護士はいつも自分たち自身の訴訟を弁護する人たちだってこと。

アンリエット ほらね！ そうくると思っていたわ！

手厳しい言い方！・・・ド・ネリスさんについて本当のことを言われたものだから、それで怒っているのね！ それじゃ、結婚すれば、と言ってほしいのね！ 愛想がいい・・・とりわけ他の女性たちにまでも・・・愛想がよすぎる夫を持っていると自慢すればいいわ！

ヴァランチーヌ、不機嫌に。その通りよ、今は、馬鹿にすれば。ほらね、まったく！ あなたは意地悪だわ！

アンリエット まあまあ、ヴァランチーヌたら！

ヴァランチーヌ、すげなく。構わないで！

アンリエット、座る。あっ！・・・すねたいの？ どうぞ好きなように！ ただ、終ったら、どうかそ

う言ってね。

一瞬の沈黙。ヴァランチーヌはアンリエットに半ば背を向ける。アンリエットはテーブルの新聞を取り、読み始める。突然、叫び声をあげる。

アンリエット、はっと立ち上がる。 ああ！ まあ、どういこと？・・・ド・ネリスさんが！・・・

ヴァランチーヌ、激しく。 ド・ネリスさんが！ どうかしたの？

アンリエット 裏切り者なの！ 結婚するって。

ヴァランチーヌ、はっと立ち上がる。 結婚？

アンリエット ほら、むしろ読んでみたら！（読み上げる。）ラウル・ド・ネリス氏とド・スタンフェルド嬢との結婚をお知らせする。このまったく魅力的な女性。（台詞。）まったく魅力的なですって、そうかもね！ やぶにらみだもの！（読み上げる。）このまったく魅力的な女性は夫に年金20万リーヴルの持参金をもたらす。急いで言っておこう、紳士たるド・ネリス氏は。（台詞。）彼が紳士ですって！（読み上げる。）紳士たるド・ネリス氏がこの結婚に見ているのは恋愛結婚だけである！（台詞。）ああ！裏切り者！

ヴァランチーヌ、こうして読み上げられている間に、すっかり打ちひしがれて肘掛け椅子に倒れ込んでいる。 まあ、こんな目にあうなんて思いもしなかったわ！

アンリエット、ひどく興奮して。 ああ！ 男たち！ 男たちときたら！ 困ったものだわ！

ヴァランチーヌ、辛そうに。 それなのに愛していると言うなんて！

アンリエット、辛そうに。 駄目、しっかりして！ 縛り首にする紐の値打ちもないのよ、あの人たちは！ あなたが結婚したがっていたのは、まさにそんな男なの！・・・それなのに私があなたにそんな馬鹿げたことをさせておくとも思っているの？・・・まさか、冗談じゃないわ！

ヴァランチーヌ ああ、悲しいわ！ お従姉さま・・・

アンリエット そうね、今は溜息をついて、「ああ、悲しいわ、お従姉さま」って言うのね。でも、さっき、この結婚を思いとどませようとしたとき、馬鹿なことをしているとやったと言ったとき、確か、あなたは怒って、そんなふうにあなたの得にならないことをしていると私を恨んでいたじゃない！ でも、今は私がどれだけ正しかったか認めらわね！ とんでもない、あなたは何も分かるうとしなかった！ もしあなたの言うことを聞いていたら、あなたのお母さんをお願いに行っていたわ！・・・そうしたら、私、あなたの子供の不幸に加担することになってたわね！ ああ！ さあ！ ヴァランチーヌ、あなたは同情されたりする人じゃないのよ。

ヴァランチーヌ、悲しげに。 アンリエット、あなたに言われると辛いわ。

アンリエット これで将来私の言うことを聞くのを学ばばいいのよ！

ヴァランチーヌ ああ、悲しいわ！ お従姉さま、どうして私が知ることができたかしら？・・・

アンリエット なるほどね！・・・あの裏切り者、私もだまされていたのよ！・・・ああ！ でも、さあ、今は惜しくないわ！

ヴァランチーヌ、激しく。 ああ！ 私だって、もちろん！（悲しげに。）それでも、分からないけど、じーんと来るみたいなの。

アンリエット どうしたことかしら、泣いているの？

ヴァランチーヌ、素早く目を拭う。 私が？ いいえ、お従姉さま！

アンリエット 子供ね！ 私に涙を隠してどうなるの？ さあ、恥ずかしがらなくていいの・・・恥ずかしいのは涙を流す人ではなくて。（キスする。）涙を流させる人のほうだわ。

ヴァランチーヌ、やっとのことで。 どうでもいいの、お従姉さま、私泣かないわ！ 彼は、こんな涙を流してもらう価値もない。

アンリエット、優しく。 ああ、なんていうことなの！ 私のかわいそうな嬢ちゃん、あなたの初恋は幸せじゃなかったわね！・・・でも一つ慰めにすればいい。彼の奥さんになったらもっと不幸になっていたかもしれないと思えばいいのよ！

ヴァランチーヌ そのとおりね、お従姉さま、だから、私彼のことはもう考えたくない、忘れるって約束する！

アンリエット そうするのが一番いいわ、お嬢ちゃん！

ヴァランチーヌ、辛そうに。 そして憎んでやる！

アンリエット、激しく。 ああ！ それって気をつけなさいね、かわいそうなあなた・・・彼を熱愛することになるから。

ヴァランチーヌ 私が・・・熱愛？ でも・・・

アンリエット ああ！ あなたも、他の女とまったく同じね。さあ！ みんな同じなの、私たち女はね！ だから、彼を憎もうとしない、裁いたりもしないでね、というのは、もし、あなたの苦しみが彼を強く非難するなら、あなたの愛はまた言い訳を見つけて彼を弁護することになるから。彼を忘れなさい、以上！ そして心の中で少しずつ忘れるようになり、愛はもうなくなりあの男を弁護することもなくなるの。それで分かるの、あなたがどれほど彼を軽蔑するか、彼が流させた涙をどれほど神に感謝するかが。

ヴァランチーヌ、やさしく。 私の大好きなアンリエット！・・・やさしいのね、あなたって、・・・慰め

ようとしてくれるし、私に泣いてほしくないと思っているし。

アンリエット、激しく。もちろんいやよ、泣いてほしくない！ ねえ！ もし、そんなあなたを見たら、招待された人たちは何て言うかしらね！ あなたには逆に陽気でいてほしいの、笑って、踊って、つまりは楽しんでほしいの！・・・さあ、嬢ちゃん、キスして。（彼女らはキスし合う。）さて今は、スタンフェルド嬢、あなたは「私たちの未来の夫」と結婚してもいいわよ！

幕

* 以上、解説、あらすじ、本文の訳はすべて、George Feydeau, *Théâtre complet*, Tome II, édition de Henry Gidel, Classiques Garnier 2011. 所収の *Notre Futur* に依る。ただし、本文に編者がつけた注は省略した。